第柒拾捌冊 十九

萬葉集巻第十九

天平勝寶二年三月一日之暮眺矚春苑桃李花作歌二首

大伴宿禰家持

4139 春苑紅尓保布桃花下照道尓出立𡢳嬬

はるのそのくれなゐにほふもゝの花したてるみちにいでたつをとめ

4140 吾園之李花可庭尓落波太礼能未遺在可母

わがそのゝすもゝの花かにはにちるはだれのいまだのこりたるかも

見飛翔鴫作歌一首

大伴宿禰家持

4141 春儲而物悲尓三更而羽振鳴志藝誰田尓加須牟

はるまけてものがなしきにさよふけてはぶきなくしぎたが田にかすむ

三月二日攀柳黛思京師歌一首

4142 春日尓張流柳乎取持而見者京之大路所思

はるの日にはれる柳をとりもちてみれば都の大路おもほゆ

攀折堅香子草花歌一首

4143 物部乃八十𡢳嬬等之挹乱寺井之於乃堅香子之花

もののふのやそをとめらがくみまがふ寺井のうへのかたかごの花

春乃そのくれなゐにほふ 此哥類聚抄注の本書ニハ結句を出しる をとめ 左注風俗ニ出 [illegible] 詞同此哥ハ園の桃の 句ニ作る人の [illegible] [illegible] [illegible]

春まけて物悲しきに 童蒙抄云春まけてとハ春さりてと云也 まけてとハ罷とりける也 仙覚抄ニハまうけごとハ三更の [illegible] 但仙抄ニハ [illegible] [illegible] 春乃日に [illegible] 柳 [illegible] 都の柳 [illegible] ものゝふのやそをとめらが [illegible] 物の部ハやそ此 [illegible]

八十乃（ヤソ）ハとしハおほくの乙女らくみまかひいはゝし井をくむさまをいへり
可し類聚古本風躰抄ニ堅香子花ツヽジニ似タル花ナリと釋しニ
仙覚云古点ハかしのはなとよめるを檜本にかたかこの花とよみかへて
とあり万葉本のみなよりかとてもしふ点ハかたかこのはなとよみて
流布する刊本に成ぬ

童蒙抄云春なれは
小屋も帰るなれを
こゝめしまるし
玉京ならハ屋の歌也と
こよなかつる也
まうけてかへる
此歌ハ童蒙抄ニ
まちまちてのことを
但此歌ハ春をまう
けてかへるとて
帰るなれしきや

4144

見歸（カヘルカリヲ）雁歌一首

大伴宿禰家持

燕（ツハメ）くる時になりぬと雁かねは（尓 奴等 之 鳴 者）
ふるさとおもひつゝ雲隠れなく（本郷 思 都追 喧）

4145

はるまけてかく帰るとも 一云春されはかへるこのかり（設 而 如此 等母）
秋風に黄葉の山をこえこさらめや（不越来 也）

夜裡聞（コ）千鳥（ヲ）歌二首

大伴宿禰家持

夜くたちにねさめて
見安云夜くたち夜
のふくるをいふ 祇曰
夜くたちニハ曉の事
也斜ハ字也ハ曉乃
神楽にて河瀬をこめ
て千鳥のなく事也
鳴わかうれしきことを
よめり私云しかし共
なりともむかし古
本風躰抄ニかり
夜くたちく鳴河千鳥
童蒙抄云夜くたちニ
ハ夜ふくるといふ
心のひきうれたる
むつこゝろわかおもふ

4146

夜くたちにねさめてをれは河瀬とめ（具多知 尓 而 居 者 尋）
こゝろもしのに鳴ちとりかも（情 毋 之 奴 尓 知 等 理 加 毛）

4147

夜くたちてなく河ちとりうへしこそ（降 而 河波 知登里 宇倍之 許曽）
むかしの人もしのひきにけれ

聞（ク）暁鳴鴙（キジヲ）歌二首

大伴宿禰家持

4148

杉の野にさをとる雉いちしろく（左 乎 騰流 灼然）
ねにしもなかんこもりつまかも（啼 尓 之 毋 将 哭）

4149

あしひきのやつをのきゝすなきとよむ（足 之 八 峯 之 鴙 鳴 響）
あさけの霞見れはかなしも（朝 開 之）

あるゆゑにいひなせるべし これとよめるも
杉(スギ)乃野にさをどる 八雲抄云杉乃野 越中也 さをどるはきゞすをとゞる
よしなりと 童蒙抄云家持歌也 大戴礼曰正月雉震雊 礼記月令律中大
呂雉雊鶏乳と 玉篇に雊ハ雄雉鳴也 いちしろくねをなく心を上るハ隠妻也 鳴(ナキトヨム)郷音
ほしいまゝにつまこひ 説曰八尾ハ鳴ことこの山の尾也 おもひきこえし
と出るよく心見てより哥乃心ハものゝふのあまたの山鳥わたる
こゑをきゝたに雉とよめる 尾も面白きをよめり 山のこの
ハ秋の心なるべし 玉葉やつをハ八雲抄ニ八ツ峯のきゞすやなきねとぞと
ろく夫木集にも光俊哥 をちこちにきゝしやつをの山鳥もなれしとやしるとし
すゑりしとかくらるゝもやつをとよめり 一説にいふ好もの比也とも
思ふ心にや 猶くはしきはあらためてかきつくべし

4150

遥(ハル)聞(ニ)泝(サカノボル)江(ニ)船人(ノ)唱(ウタ)歌一首　大伴宿祢家持

あさ床に聞(キ)けば遥(ハル)けし射水(イミツ)のかは

あさ床(トコ) 都れ床に遠く峰音(?)のきこゆる射水の川 越中也

朝(アサ)漕(コ)ぎしつゝうたふ船人(フナビト)

あさこぎは朝舟をこぐ こゝし

4151

三月三日宴歌三首　大伴宿祢家持

けふのためとおもひて標(シ)めしあしひきの峯(ヲ)の上(ウヘ)の桜かく咲(サ)きにけり

今日の為 上巳の桜宴のためしめ 標めおきしいふ山桜の おのづから咲けるをいふ

4152

奥山のやつをの椿つばらかにけふはくらさねますらをのとも

おく山のやつをの 童蒙抄云やつをとは八峯をいふ 八峯ともかける 玉葉序云 不安云

4153

からひとも筏うかべてあそぶてふけふぞわがせこはなかづらせな

漢人毛筏浮而遊云今日曽和我勢故花縵世奈

ほつえのふるへしはな ら… 玉葉詳なり うかべ遊ぶは唐にて からひとはをもちて
説曰ハ三月三日二八上巳の祓をして湖海にて盃をうかべて遊る故なりとす 又雅宴とす

也そやかりひさしてよめる　東野別当大伴御笠の注云天平二年
冬十一月大将軍藤原朝臣宇合卿西海道節度使に任ぜらる
時に高橋連虫麻呂が歌一首并短歌
曲水宴をよめる　漢書に云ふ成帝三月上巳に於て
と云々　かくのごとくなりてせりと云々　文集曰開成二年三
月三月河南尹李待讀洛濱に禊せんとて白居易以下十五人を召して舟
中に宴を設け舉酒抽毫十二韻をもとむ　舟同李詹汎體為穆生勢
上巳暮之芳菜池主の詩
三月八月詠　白大鷹歌一首并短歌
大伴宿禰家持
うちなびく　春の柳
とりもちて　見つつしのはむ
こしふしすめば　なつかしき
かりがね聞けば　都なる
なでしこが花
うつくしき　人の待ちつつ
ぬばたまの　夜はすがらに
こと尽に　語りつがひて
百代までに　かくしもがもと
あしひきの　山橘の
いや重け吉事
右一首三月二日
詞の部
こいかりもこと
さくをさうりて
こともをさうりて
見さうる人月
冬きくひも為と
うこゆよるくやと
そなる守り
こと物をも心ぐく
い和るし
やて野
こと
るまき
のことい
小玲
北の走し白壁
ことさけ
念
おもふものうち
語
ここさけ
繁
見さく
人めこと
等
見つつ
情
うこゆなこころ
奈具也
寺
もち
附
ゆまくともこちよる
白壁
之
ありけこと
延
ありさけ見つつ
之備
うちをこのへうれしき
附
都麻屋
鳥座
うたくにゆや
ゆひすら
飛
うれのもふまま
銅
真白部
多可
ふりさけ
多
見つつ

反歌

夫形尾 屋戸
やどもりの 守れる時に 行かずして
いきどほる心を 何にたとへむ

飼久
おさまりて 久しくなりぬ 年月も
やどもりの 尾のごとくに

潜鳥歌一首并短歌

大伴宿禰家持

往更去者
昔より 今のをつつに かくしこそ
年魚狭走島の
飛ぶ鳥の 通ひ来ましか 磯も
八潮
なみ 白波騒き 潮も
鶴毛之
干なく 鶴鳴きわたる
あゆ
あゆ 狭走島の
磯廻に 潜く鳥の
鵠鷹
潜鳥 目かれせず
思ひ並べて 汝と二人
吾姉子
かづきしなゆる 潜鳥の
息の緒にして 思ふ妹を
あふさわに 見ずは
紅
恋しくあるべし

反歌

肺
これやあの 名のみを聞きし
絶ゑにし 鳥
潜鳥の 音をも聞くべく
毎年
来鳴きとよもす
鶴八頭
潜鳥 目かれせず
走れども 飽かぬ
潜鳥の 見まくほしき
かづきはすとも

季春三月九日擬出挙之政行二
於二蒲江一村道上一属目物華之詠

擬ニ出擧之政行一ニおもき
依ニ春出擧巡行ス諸郡一ニ
とあり
屬ニ目物華之詠 目に
ふく西のあれいろ
も景物を云し
礒のうへの都万麿を
仙田にはつくりまう
る識人ふてあく
ミいそのうへの上
あめつちのをさき
天地開闢よりと
あらへきされ
なへまされはと
てる原山のみをれ
あめつちの首尾

并ニ興中ニ所ノ作之歌
過ニ澁谿埼ヲ見ルニ巖上ノ樹ヲ歌一首
大伴宿祢家持
礒のうへのつまゝを見れは根をはへて
年ふかゝらし神さひにけり
悲ムニ世間ノ無キヲ常歌一首并短歌
大伴宿祢家持
あめつちのとほき始めよ世中は
常なきものと語りつき
きつれ天乃原振さけ見れは

天乃常なきを云し
山のこぬれも 地の常
常なきをいへり こぬれハ
こすゑ也 花咲て
秋露霜にふれハ常なき
うつせミも 人合
乃紅顔男女ともに
紅の色もうつろひ
紅顔やつれ衰ふる
ゆくつき 人安云
夕にかはるを雲霧の
姿ひとつ夕ハ衰ふるを
云し
ふく風をも 定めなし
行く水も たとへこと
こゝろ涕

てる月もみちかけしけり あしひきの
山のこぬれも春されは花
さきにほひ 秋つけは露霜負ひ
て風ましりもみちちりけり
うつせみもかくのみならし 紅の
いろもうつろひぬはたまの黒髪
かはり 朝のえみ夕かはらひ
吹風の見えぬかことく ゆく水の
とまらぬことく 常もなくうつろ
ふ見れは にはたつみ流るゝ

今さらめかねつも

反歌

こさらいぬ本すゑ尚 春さき開 我は
言 遅良久波 常をる今こそ
一云 無 常あらめこそ

うつせみの常あさる人 世間
こころはやさすを。 月をかも
一云 月々かわき

豫作七夕歌一首

大伴宿禰家持

豫作七夕歌二首 天平勝寶二年三月乃往反 未レ奏之

妹り袖もれ松せん 可年 河乃湍り 廿
幸牛小鹿くよりり天 左鉄布 氣奴乃尓
の乃霧れ姉り 霧
あり衣文くりと 慕振勇士之名歌一首 并短歌 準和ス山上憶
良臣作歌ニ曰
おもくこれ父乃みこと 大伴宿禰家持 知智 并訂等 波描蘊。
母の みこと おろかこころ 盡 西
念 吹りみんこそなれやも 大
支 らなや ひもくり 可在 き 梓弓
毛知 投 弾
すゑふりおこし矢ともち 射和多之 朝。 乃 きこしおきて

何ひき乃(ノ)八川(ハ)峯越(ヲ)お山子(ノ)そ(ヲ)さ(ヲ)ま
(ヲ)こころ(ヲ)さ(ヲ)つ(ヲ)す(ヲ)ほの代(ヲ)れ(ヲ)り(ヲ)
(ヲ)ま(ヲ)た(ヲ)く(ヲ)へ(ヲ)く(ヲ)名(ヲ)と(ヲ)ろ(ヲ)べ(ヲ)ら(ヲ)も(ヲ)

反歌

大夫(ヲ)ま(ヲ)す(ヲ)お(ヲ)ほ(ヲ)な(ヲ)む(ヲ)ち(ヲ)立(ヲ)
(ヲ)ほ(ヲ)の代(ヲ)な(ヲ)
ま(ヲ)す(ヲ)ら(ヲ)を(ヲ)と(ヲ)こ(ヲ)ろ(ヲ)も(ヲ)

詠霍公鳥并時花歌(ヨメル)(ホトヽギス)(ニ)一首并短歌
雖レ(ドモ)レ(カ)未(ヌ)及(ハ)レ(ス)時(ニ)依(テ)興(ニ)擬(ヘテ)作(レリ)也

大伴宿祢家持

毎(ニ)時(ノ)ま(ヲ)ち(ヲ)こ(ヲ)ひ(ヲ)つ(ヲ)つ(ヲ)あ(ヲ)ら(ヲ)ま(ヲ)し(ヲ)
(ヲ)を(ヲ)や(ヲ)ま(ヲ)ち(ヲ)
種(ヲ)ま(ヲ)き(ヲ)よ(ヲ)ま(ヲ)す(ヲ)ま(ヲ)す(ヲ)ま(ヲ)き(ヲ)ち(ヲ)
喧(ヲ)ま(ヲ)す(ヲ)

音(ヲ)毛(ヲ)更布(ヲ)耳(ヲ)開(ヲ)眼(ヲ)視(ヲ)
こ(ヲ)ゑ(ヲ)し(ヲ)か(ヲ)ら(ヲ)も(ヲ)ち(ヲ)ま(ヲ)き(ヲ)ゐ(ヲ)ま(ヲ)す(ヲ)
噴(ヲ)
お(ヲ)ほ(ヲ)ふ(ヲ)う(ヲ)ち(ヲ)あ(ヲ)け(ヲ)き(ヲ)き(ヲ)ま(ヲ)つ(ヲ)と(ヲ)き(ヲ)
有(ヲ)
き(ヲ)の(ヲ)ふ(ヲ)て(ヲ)ゐ(ヲ)つ(ヲ)つ(ヲ)ゐ(ヲ)ま(ヲ)そ(ヲ)て(ヲ)こ(ヲ)の(ヲ)ゝ(ヲ)
罷(ヲ)
や(ヲ)
鳴(ヲ)
ほ(ヲ)ふ(ヲ)ま(ヲ)く(ヲ)霍公鳥(ヲ)
従(ニ)古昔(ヲ)
ひ(ヲ)と(ヲ)り(ヲ)ゐ(ヲ)ま(ヲ)つ(ヲ)ら(ヲ)む(ヲ)
宇都之(ヲ)真(ヲ)
ひ(ヲ)き(ヲ)と(ヲ)ゆ(ヲ)る(ヲ)ま(ヲ)よ(ヲ)り(ヲ)し(ヲ)て(ヲ)の(ヲ)
菖(ヲ)
蒲(ヲ)
婀(ヲ)
珠(ヲ)
貫(ヲ)
め(ヲ)ぐ(ヲ)き(ヲ)ま(ヲ)ろ(ヲ)を(ヲ)ま(ヲ)と(ヲ)め(ヲ)ゐ(ヲ)つ(ヲ)ゝ(ヲ)あ(ヲ)ぬ(ヲ)
畫(ヲ)
ま(ヲ)く(ヲ)ほ(ヲ)ふ(ヲ)ね(ヲ)さ(ヲ)す(ヲ)ひ(ヲ)る(ヲ)は(ヲ)き(ヲ)も(ヲ)
剌(ヲ)
に(ヲ)ゐ(ヲ)ひ(ヲ)も(ヲ)れ(ヲ)
八(ヲ)十(ヲ)ヤ(ヲ)ソ(ヲ)の(ヲ)飛(ヲ)
越(ヲ)
夜(ヲ)
千(ヲ)
玉(ヲ)
も(ヲ)ゐ(ヲ)ぬ(ヲ)ま(ヲ)れ(ヲ)ま(ヲ)す(ヲ)ゐ(ヲ)ま(ヲ)す(ヲ)暁(ヲ)乃(ヲ)

こ(ヲ)ゑ(ヲ)と(ヲ)ゐ(ヲ)つ(ヲ)ふ(ヲ)ゐ(ヲ)つ(ヲ)の(ヲ)
ま(ヲ)れ(ヲ)き(ヲ)ゐ(ヲ)ま(ヲ)す(ヲ)も(ヲ)
ま(ヲ)の(ヲ)あ(ヲ)ま(ヲ)れ(ヲ)郭(ヲ)公(ヲ)
う(ヲ)ち(ヲ)ひ(ヲ)さ(ヲ)き(ヲ)数(ヲ)多(ヲ)
き(ヲ)こ(ヲ)ゆ(ヲ)る(ヲ)ま(ヲ)れ(ヲ)お(ヲ)ほ(ヲ)
ゐ(ヲ)つ(ヲ)つ(ヲ)ゐ(ヲ)ま(ヲ)そ(ヲ)て(ヲ)
乃(ヲ)ゑ(ヲ)多(ヲ)ま(ヲ)つ(ヲ)ら(ヲ)む(ヲ)
う(ヲ)ふ(ヲ)ゐ(ヲ)ま(ヲ)し(ヲ)ま(ヲ)て(ヲ)
郭(ヲ)公(ヲ)を(ヲ)ゐ(ヲ)ゝ(ヲ)
ゑ(ヲ)ら(ヲ)く(ヲ)は(ヲ)な(ヲ)し(ヲ)オ(ヲ)の(ヲ)心(ヲ)
こ(ヲ)の(ヲ)ゝ(ヲ)れ(ヲ)や(ヲ)も(ヲ)乙(ヲ)安(ヲ)云(ヲ)
本(ヲ)の下(ヲ)圓(ヲ)思(ヲ)業(ヲ)
或(ヲ)
云(ヲ)山(ヲ)吉(ヲ)の(ヲ)実(ヲ)自(ヲ)通(ヲ)
う(ヲ)月(ヲ)ゐ(ヲ)そ(ヲ)ゐ(ヲ)よ(ヲ)ゐ(ヲ)り(ヲ)
我(ヲ)こ(ヲ)ゐ(ヲ)り(ヲ)我(ヲ)を(ヲ)と(ヲ)め(ヲ)

月よ向ひくゆきかひり　あきとよ
むれごいりくあきくん

反歌　彌米頭良之久

毎時　毎年
ここととていやめりくに咲花を
折毛　不折毛
おりとしおらずもとしよりも

来　喧　不相　平朴保岁
くるそにさまくものゆへ霍公鳥
聞　藤
まけいたのくおかね月とおるを

毎年謂之等之乃波一
毎年謂二之ヲトシト等一之ノ乃ハ波ト一

家婦為贈在京尊母所誂作歌一首并短歌

大伴宿禰家持

霍公鳥まつ喧　吉
霍公鳥まつ喧　吉
花橘の香をよろみ　御言
花橘の香をよろみ　御言
暮　不聞　日麻
ゆふされば来居者
ゆふされば来居者
ひかみてなれ山のこえよ
立雲をよそのみ見つつ　嘆　藤良
立雲をよそのみ見つつ　嘆　藤良
やすくねくに　念　藤良
やすくねくに　念　藤良
ものを思へ乃
ものを思へ乃
海部　潜　取
あまつをとめ
あまつをとめ
真珠　御面
まてまてまてまて
古　珠　御面
まてまてまてまて
持見
あひ見んまでは
あひ見んまでは
尊　柄
とりえいはさねよ
とりえいはさねよ
女我　吉義
とりえいはさねよ

松柄乃久比乃末
松柄を雲のほしも赤
おい茅へいやとい
う訓よりあり
きくもの乃うら若
白玉いつまでの訓
訓べ若い毋をとる
二十三日之暮忽思一
ゆる日立あられば
曉心あらんとこゝて
ふうをよめりさ
注ねんとなさて
さてよるおそくしの
こゝさ故あるさ常の人
しおさめく稀
くさとく

御面謂之
美於毛和

反歌

白妙乃うら若
きくもの
伊家流
ひおおりそれいうるとき

三月二十四日應立夏四月節也
因此 二十三日之暮忽思霍公鳥
曉喧聲作歌二首

大伴宿祢家持

常
注ねんとおさくゆくう霍公鳥
此 始 喧
乃嘸うまちくさ

霍公鳥
おうくさす末喧こゆうくまうん
不殖 而
花橘を屋戸にうえてと
贈京丹比家歌一首

大伴宿禰家持

不見 越
妹をとうらの玉へよう
經年 無
吾情 度乃
わのこゝろこれなくる日とも

三月二十七日追和筑紫大宰之
時春花梅歌一首

裡
春乃うちれるみを
終者
大伴宿禰家持

春乃うちれるみを梅乃花

結句遊宴有所況
アソフニアラヽこと和ス
もてなり

霍公鳥今さへなき秋
又安云かつ〳〵こゝハ
ひつ〳〵むしと東かた
うた月あるへやとハ
今咄初て萬葉ひら
らすることを粧す未
ありとの山ニ寄ことの
山ニなとけて法
しらと今集の同
ふるあるき意のあり
我門ゆあるさも
我門ゆとあり此ハ
ものハてかとやうの

詠霍公鳥歌二首

大伴宿禰家持

霍公鳥今まてなきさりつやめく
さ可都良久
かつ〳〵もきこしを月あめや
イ毛能波三箇辭闕之

我門ゆあるさもとよめる霍公鳥
縦喧
雖聞飽不足
やまつ〳〵さらにあきさらめ
イ毛能波三箇辞闕之

四月三月贈越前判官大伴宿

ふるよと清て法と
越前判官也 我か拙
不勝感舊之意
池主ハ旧友ある故
かくいふ

わかせこと二池もとゝ我
中よくしも作ひし
ことと池主ハ病の
極なりけるつゝ句
なりあるも 此主ハ前
て病ふしの心と
哥法ハあるも、ハ、ふる時
ハ見奈疑之山 我中

祢池主霍公鳥歌不勝感舊之
意述懐一首并短歌

大伴宿禰家持

和我勢故等 喘
わりせこと鶏鳴而暁来者
暮去者
出立向ひ見れハ振放
念鴨
見奈疑之
なけとなくさ山ほとゝきす
霍公鳥
霍まつ聞ハいつさ
喧
喧まねく
聞
聞婆不怡毛
いやたきまねき独のみきけハくるし
興
利波
君こと吾ハ而
越
君こと吾ハ而

独のさけばさびしも　刷りて我のさけばさびしも　寂寥をたいふる身と　部云能こて世を　ク方もれて多ク　呼てせきもやすい　さびしめすおこく　ふるをもちやませと　君もしばをさし　ひしりのこさけし　丹生の山我が丹生野　国府山野もれい池の　立而の名我雅ク也　丹生の山我が丹生野　山よ心　ことこと同ク答する　霍公鳥之情上述懐作

去而　立者　狭
えいきて　ゆそいれの　さ枝り
春去者　向月　而　葛　蒲
決されい　月よむりし　あやめさ
莫　安痒　不
ふわくよそま　呼ことよめ　やすい　さま
冬宿
さて　君をまやませ

反歌
聞　婆　不怜　毛
耳
ひぐらめ　今さけいさしし　霍公鳥
丹生　去　伊　鳴　介毛
ふふ乃山　名ろう　いきさるみも
霍公鳥　莫まさをつて　我せこと
やすいさるすか　ゆめこころあるな
ヘアアク　コヽヒニ
不飽感霍公鳥之情上述懐作

下白いめく安痒　さませるこく我
おゆく莫呼せこと
山よひことよめ　山よ心
ことこと同ク答する
いこくまそま　葉
向ひしら端午菖蒲
乃ロてくもまそぎけ
らも在ころのくもこと
ゆこころと通す
方葉のけて暁月ふ
ほの字開くし
ちふふ動毛さし
けい衣りこと云ふし
おこくさすさけいら
あやろふこ八網て

歌一首并　短歌　大伴宿禰家持

呼　足　檜木
まちてく　ぬま向八かし　ひされ
山よひことよめさ莫ゆふ呼ろくさす
始　音　闇　霍公鳥　而
そつこえをきけいさるつあやめさ
奈都可之　莫　蒲　交
花橘をぬきこりへいけくまそか
賛　響　喧　之努波由
里ことよみ　あやこ原ことも　尚ころのいゆ

反歌

方葉のて暁月に　訪見　而　介
鳴　霍公　鳥　聞　者　借
くかてさすきけ八　ぬり
霍公鳥　雖聞　不足　取　介
かてきすきけらあす綱とり

擭而奈都氣奈
りて鳴金
おけばかしとなくね
かとときす飼こせ今年
来向ひむ
いまこんえとつあまきこまんを

四月五日従京師贈来歌一首

留女之女郎

山吹乃花ぞ持而
軟
これみし妹を思のいつるも

詠山振花歌一首并短歌

大伴宿禰家持

うつせみは命を惜みなげくこと
繁
うつせみは恋の繁けく
攀而折毛不折
なほしまされば手折毛不手折
毎見情奈疑
すもろこしにこころなぐさと
振
山吹を屋戸に植而
弥
なほしまされば

反歌

山吹を屋戸に植てかへるでに
益礼
なほしまされば

四月六日遊覧布勢水海作歌一首并短歌

大伴宿禰家持

しげきこゝろをみあきらめ
まなこの欝懐を景
氣にみあきらめ心を
慰めやらんとてと
を船ならべてまかい
漕めぐれはとぞ云
まつは見安云よきなり
たるひめ 見安云垂姫
乃明神をいふ 萬葉十
八にたるひめ乃浦と
よめりし
しく〳〵に恋はまされと
頻にけふの海の見所
引き恋しまされども今
日のみにはあくまじ
みつゝしのはめ けふ布

おもふどちますらをのこのこのくれの
しげきおもひを見あきらめこゝろやらんと
布勢乃海に小船つらねまかいかけ
いこぎめぐれば乎布乃浦に霞たなびき
たるひめに藤波咲きて濱きよく
白波さわきしく〳〵に恋はまされど
けふのみにあきたらめやもかくし
こそいや年のはに春花の繁き盛に
秋の葉乃もみたむ時にありかよひ
見つゝしのはめこの布勢の海を

勢海を見てく恋
思ひんとなり
藤奈美乃花の盛
浦こぎつゝ漕こ
きめぐりつゝ年
に思はぬやうに来と也
水鳥 うと和ス

うこころも同じことす
同じ夷守なれは越中
越前も同じやうなと
家さかるとのへ
池主と家持かめには
同じ国なりしが今は越前
に離れて居るを
うぜ年は鶏の多さと

反歌

藤なみの花の盛にかくしこそ
浦こぎたみつゝ年にしのはめ

贈水鳥越前判官大伴宿禰池主
歌一首并短歌
九月九日 附使贈之

大伴宿禰家持

あまさかるひなにしあれはそこゝも
同じこゝろぞ家さかり年のへゆけは
うつせみは物念しげしそこゆゑに
こゝろなぐさに霍公鳥なく初こゑ

玉
そこよそれねもころ
まくね地を持の
檜を玉はめくたる
くは初を玉を重
ぬさこいてる
かつきて かつそれて
也葉それ葛の心
きてこの作お我中
ひ隔よ宝隔へ
きう植いねきふ
おそくさ給は
物をまつてとる
そきようとうさ
きてこの隔をる
うかてさねこ給

いをこそよ歌
鷗にちうそん
きうつとはきうんれ
がしそは初心物
小鮎をうせそき初
尾い我よけ五よを
桃の花 おこうの紅
新をいんそいう
初女のおる鮫のふ
こうそこようし
也金面桃花相映紅
なれの 兄妻百の
内心重衆新のう
き物のうさ有ね
笑姿智物似眉張
えそおうり 須霧

をおの珠の安倍貫ぬき
遊 波之母
ここれしますおとうも
立而 叔羅 沂
そくきらいるさのう
平 龙泥 渡 早湍
ひ隔うさてのまそせ
氷鳥 潜
おいうをきつめつ月ま日に きう
和我
しあうそねそきのせこ

反歌

きくいせをるつわくせこい
うかくさねこころきさに
うく
鷗河ちうくんあのきうこい

おまよいさむけなしいたし
詠二霍公鳥并藤花歌一首并短歌 四
月九日作之也

大伴宿禰家持

桃の花紅色になりぬるかしわ
面輪
乃うちふき柳乃細き眉根を咲
城嬬 良我
まつり多き人乃待つらむ
持 有 真 盖 上
取もちて見ば屋戸の橿山かげをだに
呼 等来
それ乃鬘に折かざすまでめでうり
暮
且あさ飛渡る雁乃鳴声を聞けば
喧
都なる霍公鳥しば鳴きて
冬予
我乎恋しむ

（觸）とおもひよちて（す）夜浪乃花（を）
（擧而）つみりよちて神よこされり
（洲）まして深らも

反歌

霍公鳥（鳴）
霍公鳥なくおもひ（觸）ともちりふりぬ（落）
國もとめ夜おほみ乃花

一云ちりぬ（落）と神よこされつ君がのも

仙曰近巨方昭れハ其のちらんと思てやうよ郭公の勢花消ゆ
よめる　かうけき　立雲かすり　立て神おもひ立てる忘
こと立雲のたちてをおもひてねをなくる
神よこされ一神よきへ夜花を神よこきへてちや神ハ深るも
霍公鳥なくおもひ（觸）ともちりふりぬ（落）と

一云中乃ふくもりかも吹乃月心ハをやうりよちて神ふこされ
けりと立

霍公鳥なくさつきを
我門乃國ハ皆も
郭公の初音やまぬ
人伴のこゝろ慰て諸
諫なき國そ忘ぬ

わうてこと立のりく
立のりくハ立ても
心こうへの山乃雲ハ公名
ハ立こ但いうへの山ハ境
月立（月）わりなきて
仙曰霍公鳥ハ立夜月

更怨霍公鳥（ニウラム）晩歌（ナクヲソノキヲ）三首

大伴宿祢家持

霍公鳥（咄）
霍公鳥なきし國ぬと告れとも
吾ハ幾許（吾）
吾ハ幾許しくすきつ
わらこと立のりく立てに霍公鳥
伊頭敝能（不知介）
いつへ乃山を可（持ン超）
立月（立）わりなきて
まてとさるのねかてらさすかし

贈京人歌二首（ニ）　為贈留女之女郎（ニ）家婦（ニ）誂作之也　女郎者即家持之妹

大伴宿祢家持

来鳴呼定といへりと
の意にて呼定しむ
妹に似る草と見し
歌旨妹に似たるとハ
花のよきをいへる詞
この歌ハ誰か手折しと
いひて人を妬むさま
つれもなくかれにし
我を離れぬとて人え
ハいへと逢ぬ日多くて
思ひをする物なと
藤なみの影なる
舟林ハ枝云ふつくハ
石をも珠とそわか見れ
て見れハるとなし
歌旨ふつくとハ沈む

4197
妹に似る草と見しより吾標めし
野邊乃山吹誰か手折りし

4198
つれもなくかれにしものと人ハいへと
逢ぬ日まねみ思ひそ我する

四月十二日遊覧布勢水海船泊於多祜湾望見藤花各述懐作歌四首　大伴宿祢家持

4199
藤なみ乃影なる海の底清ミ
しつく石をも珠とそわか見る

次官内蔵忌寸縄麻呂

4200
と云調也此集に多く底に
至るまて照ふ誰擬に四ふ
して行んハ見ぬ人の為
をとも心底にて藤の陰り
あれハ見ぬをも思ふる
とよめり家持卿之詠
多祜乃浦の底さへ
藤の影に底清み
旬また此集人丸集
をしき縄九詠せる

4201
いささかに思ひて来しを
妹ハかくこゝの袖也
覧せんと云ひて詠む
藤枝に一夜へんと
藤なみを仮廬に
藤と偽庵に立て也

多祜乃浦の底さへにほふ藤なみを
かさしてゆかん見ぬ人のため

判官久米朝臣廣縄

4202
いささかにおもひてこしを多祜の浦に
さける藤見て一夜へぬへし

久米朝臣繼麻呂

藤なみを仮廬に造り湾廻する
人とハしらにあまとか見らん

恨霍公鳥不喧歌一首
判官久米朝臣廣縄

4203　4204　4205

与するをえしてお
ありするに付て海
士や人の見んを
家にゆきてはを
是も同様の時れ
歌して山の遊びの
ときしなゆきれと
わかせこか捧けて
和名云厚朴ほゝかしは
何よりも宛の字也
推量してよめし讀
人講師は國分寺の
講師也古は國々に
置れたるを講師
一寺の僧尼のつかさ也
すめろきをきをきて

家にゆきておにをかたらんあしひきの
山ほとときす ひとこゑもなけ

見攀折保寳葉歌二首

講師僧恵行

わかせこか捧けてもてる保寳かしは
あたかも似るかあをききぬかさ

守大伴宿禰家持

すめろきのとほき御代にはいしきをり
酒のむといふそ此ほゝかしは

還時濱上仰見月光歌一首

4206　4207

上古には山朴柏を盃
にせしこと口訣
しぶたにを行て
渋谷は江にあるの
館への道さの地也
又安云月夜あきてん
三六月を見飽ての
りんを志しは也
わかせこ 廣縄をさして云
かきつの谷 又安云
名の谷と 垣津谷の
あけされは明ゆきを
ゆふされは夕へは
縄の者ははゆるを云
よそくに
こきとをと

守大伴宿禰家持

しふたにを指てわかゆく此濱よ
月夜あきてん馬しはしとめよ

四月二十二日贈判官久米朝臣廣縄霍公鳥怨恨歌一首并短歌

大伴宿禰家持

ここにてそかひにみゆるわかせこか
かきつの谷にあけされははりのさ
枝によふされは藤の繁みによろよろ
になく霍公鳥わかやとのうへ木

橘の　和流
下吹きかへす　風をまつ間に
あくうこいう　不レ飛
今ぞ来れる　橘の
谷うつりきて　家居せる　有之
やどり　はなれず　ほととぎす
又歌
吾　幾訂
わりこそ　まてとまるわりね　不レ鳴
ひとりゆつ　不レ告
ほととぎす　霍公鳥ノ
四月二十三日和二家持一詠レル
歌一首并
短歌
橘久米朝臣廣縄
しかくいへれども
さといあまとらもおとさすいま
しきまつすあくこえをきかまくを
まとにかしかそもゆふへ
まいかをみわたしてこもれる
いこえをきかしいまもきかもと
又歌
敷治
ふちはかまの　ふりにすきねかも
やまおりかさすおとりきかねかも
五月六日追二和ス一ラ同イヲトメツカノヲ一首并
大伴宿禰家持

追二和ス一處女墓歌一首并
短歌
山集才九ヶ芦屋の
処女墓の
まことくて里いおれども
言まま都公市ニ
おもほれいし
きこもりくりりと
きこもりくりりと
かくりくりりと
かくりくりりと
ふちはかまの　ふりにすきねかも
やまおりかさすおとりきかねかも
五月六日追二和ス一ラ同イヲトメツカノヲ一首并
大伴宿禰家持

右一首久須婆之伎

事こちたみ　知努
言緒　競
さ寝ねやとこうる　壮子
いちしの　寿
うつせみの名をあらそふ　相
こもきりの　嬬問　為家留　城嬬等之
つまよばひ　有
あがするなゆめ　青
いけ思ひ　尤
春花の　照
秋の紅葉　有
移りかはりて　尚
恋ふるまに　大丈
壮
月重ね　為
年かさなりぬ　而
時の　離家
うつろひ　暮
見るごとに　満
いや珍し
海遠
思ひ出でつも

反歌

春花の　移りかはらふ　見るごとに
いや珍しき　君にもあるかも

又娉ひ誂へて出で立つ妻どもを

八隅
しし　潮
くしろ　奥墓
まき寝む　此間
妻は　継
いや先立ちぬ　而
後れにし　有
我は悔しも

反歌

平等女等之
生
おくれ　更
為
おくりて　生
後
恋ひつつあらむ

黄楊
つげ小櫛
生而
取らずして
有
あれ

乃むくまに開しといふなり　舟林云杖云塚の上につけたるに
桜をさされハ生付くるなりと見え侍りといふなり
をとめにかの挿の事なり　せかりの花かくといへハ桜をうつしつげ
乃つけのにハせかりりわりくうちあひてむしうた　同集九二
福丸か友か許に別れのかり尾末の枝をさりけりをくりしかはちぬ男
みよをへだてゝも

あゆをいてみなあの
何ゆゑの風をいてゝ
おこす沼は世ある所
いさ陵のかきまき
るやうにしまかや
ゑほまて

南右大臣家　武智麻呂也　南家の祖也
不比等乃男也　母ハ右大臣蘓我羅自古女娼子

贈京丹比家歌一首　大伴宿禰家持

あゆをいて奈呉の浦わによするなみ
いやちましにあわするかも

五月二十七日吊壻南右大臣家
藤原二郎之喪慈母挽歌一首并短哥
大伴宿禰家持

うつしけれやよ伴の名
次はれ八十伴男と称
臣をやうらもの初也
まつろふ日本紀順マツロフ
かくあしおれハ君主
ことふれにしまの安
今もさし家持愛て
ことのちのよを讀かるを
風雲にこといひかよへど
後風家雲ことい家
始りかよへどもとき
ことふ祈りね藤原二
郎如またみふ逢
もしきり　君をか
めて家郷と二郎の
母のなひそてたまへ

あめつちのはじめの時ゆうつそみの
八十伴の男ハおほきみにまつろふものと
定まれる官にしあれハすめろきの
みことかしこみひなさかる国を治むと
あしひきの山河へだて風雲に
言ハかよへどたゞにあはぬ日の重なれハ
思ひこひいきづきをるに玉ほこの
道くる人のつてことに吾にかたらく
はしきよし君ハこのころうらさびて
なげかひいます世間のうけくつらく

4217 4216 4215

たらちねのおもの命
慈母を喪するを弔ふ
おもの命ハ母の事也
時しハあらんをとは
なとハ若盛りに国の
乃鏡の失しを時し
ともあらんをといふ也
玉藻なす靡きの
訓註なりしきこひ
水は行水しる也
おのらかや人のいひつる
するなる事を惜し
此狂言を人のいひ
つるなるへし
梓弓つまひく音
遠く聞く訓註

さく花も時にうつろふうつせみも（用 毛）
つねなくありけりたらちねのみはゝの（無常 足千根之御母之）
みことなにしかも時しはあらむを（命 何如 可毛 将有）
まそ鏡見れどもあかず珠の緒の（不飽 冬 ヲ）
おしき盛りに立霧の失ゆくごとく（惜 サカ ウせ 去）
置露乃消ゆくごとし玉藻な（去之如 ケクニ 成）
靡きこいふしゆく水のとゞめかねつと（ナビキ 臥 逝 留 不得）
たはことか人のいひつるさかことか（狂言 哉 之云 逆言 乎）
人の告つるあづさ弓つまひく夜音の（梓 弧 夜 之）
とをとにもきけはかなしく庭たつみ（遠 ヲト 聞 者 多豆水）

庭たつみ流るゝと
いふ訓註也
遠音にも君がなげくと
あはれなる事ハいふ
君らとに嘆息
ますをきゝて心にやみ君
ども思ふ也
世のありれ常なき
大夫らしていかで
常ハのがれぬ道理ハ
知りけんをさのみ
心を尽し嘆くなと
慰めいさむる也
卯の花をくたすながめ
卯の花くたしといふ也 四五
月比の長雨をみづがさ

ながるゝなみだとゞめかねつも（流 涕 留）

反歌

遠をとにも君がなげくときゝつれは（扁念）
ねのみしなかゆあひおもふわれは（哭 耳 所泣 相 念 吾者）
世のなかの常なきことはしるらんを（間 無常 之）
こころつくすなますらをにして（情 盡 莫 大丈）

霖雨晴日作歌一首

大伴宿祢家持

卯の花をくたすながめのみづはなに（令腐 霖雨 始水 逝）
よるこつみなすよらん子もがも（縁 木 積 成 将因 兒）

五月見漁父火光歌一首

大伴宿禰家持

鮪　衝（イカ）ニ出（ヅ）ト　海人　燭（トモシ）有　伊射里（イザリ）

（保本可将ヶ内）

（余一下）

六月十五日見蓮子早花歌一首

大伴宿禰家持

蓮子　開

（将ヶ咲）　（待）　（者）　（遠）

従京師来賜女子大嬢歌一首并

短哥

大伴氏坂上郎女

（万十九　廿三）

（等乎牟乃麻欲乃姫伎）

（為久之恒）

4221

は波ハ皆泪頭也
ゆらくかゆらく
まにまにありて待
まきの大船ハ泪頭也
たつ。見安云を不用也
けぶりあかねりし 蓋
乾本訓あやしきなり也
かくばかり恋しくし
鏡を見るしめるをと
て別ちなきものとして
見ぬ日なく時なく

反歌

かくばかり恋しくしあらばまそかゞみ
見ぬ日時なくあらましものを

4222

この時雨いたくな降りそ
もみぢ散りなんいはむが
むごいふも同じ

九月三日宴歌二首　掾久米朝臣廣縄

このしぐれいたくなふりそわぎもこに
みせんがためにもみぢとりてん

4223

あをによしならの人
あの人の見るとき

守大伴宿禰家持

あをによしならひとみんとわがせこが
しめけんもみぢつちにおちめやも

4224

見えんを愛する也
わがせこはさとのこと
藤原皇后宮　光明皇后也
吉野上皇の御時也
東人の傳へたる故也
皇后の御歌として鳴
代々御歌に載之也
朝霧のたなびく
田井乃雁の鳴音を
吾宿の萩とゞめんやと
之萩もちりさに雁も
めでゝ飛帰るまじやと
の意なるべし

幸芳野宮之時御作歌一首　未詳年月　十月五日河邊朝臣東人傳誦云爾

藤原皇后宮

あさぎりのたなびく田ゐになく鴈を
とゞめえんかや吾屋戸乃はぎ

4225

朝集使　續日本紀に見ゆ
あひきれ山のもみぢの
僧山の木々もみぢ

十月十六日餞朝集使少目秦伊美吉石竹時作歌一首

大伴宿禰家持

足日木の山乃黄葉にしづくあひて
ちらん山ちをきみがこえまく

十二月雪日作歌一首

大伴宿禰家持

山雪乃消遺(ケ)之(ノ)時奈(ニ)去來(ト)歸(ラ)奈(ム)

山橘乃(ノ)實(ノ)毛(モ)將(ム)見(ル)人(ノ)

山里乃(ノ)雪乎(ヲ)見(ル)礼(レ)婆(ハ)

承贈(テ)尓(ニ)大臣卿之命(ノ)作歌一首并

傳(ヘ)云(ハク)笠朝臣子君後傳讀者(ト)

越中國掾久米朝臣廣縄(ガ)也

三形沙彌(ガ)

大殿乃(ノ)山(ノ)之(ノ)雪(ノ)乎(ヲ)踏(ミ)平(ス)

敷(ク)(不)零(モ)君(ガ)乎(ヲ)待(チ)香(カ)尓(ニ)将(ム)有(ル)

山乃(ノ)之(ノ)雪(ノ)乎(ヲ)

由縁(ヨシ)勿(ク)零(ソ)之(ノ)

見(ム)人(ノ)乎(ヲ)哉(カ)

消遺(ケ)之(ノ)時(ニ)

山雪乃(ノ)消(ケ)乃(ノ)遺(ル)時(ニ)(カ)奈(ニ)

山橘(ノ)之(ノ)實(ノ)毛(モ)將(ム)見(ル)人(ノ)

山里乃(ノ)雪乎(ヲ)見(ル)礼(レ)婆(ハ)

承贈(テ)尓(ニ)大臣卿(キミノ)之命(ノ)作歌一首并

傳(ヘ)云(ハク)笠朝臣子君後傳讀者(ト)

越中國掾久米朝臣廣縄(ガ)也

三形沙彌(ガ)

大殿乃(ノ)山(ノ)之(ノ)雪(ノ)乎(ヲ)踏(ミ)平(ス)

敷(ク)(不)零(モ)君(ガ)乎(ヲ)待(チ)香(カ)尓(ニ)将(ム)有(ル)

山乃(ノ)之(ノ)雪(ノ)乎(ヲ)

由縁(ヨシ)勿(ク)零(ソ)之(ノ)

見(ム)人(ノ)乎(ヲ)哉(カ)

其(ノ)履(ヲ)

おみそうね雪(ノ)

反歌

御見(ミ)杖(ヅエ)

多麻波牟曽(ソ)

そつくしおそ(ク)ふらんうたの

山ことをやめよ(ク)乃雪なみそうね

天平勝寶三年正月二日守舘(タチ)集

宴於時零雪殊(コト)多(ク)積(リ)有(ヨカ)四尺焉即

三人作(レル)此歌(ノ)一首

大伴宿禰家持

新(アラ)玉(タマ)乃(ノ)年乃(ノ)初(ハツ)尓(ニ)

雪乃(ノ)平(ヒラ)乎(ヲ)

踏(ム)平(ス)之(ノ)

如(ク)此(カ)

正月三月倉集(アヒツトニテ)ニ内藏忌寸縄麻呂之館ニ宴樂(スル)時作歌一首

大伴宿祢家持

落(ル)雪を腊(コレ)りて奥(ヲ)つ香(カ)の有(ル)ものと梅(ノ)印(シルシ)を遣(ヤ)りてある乃(ノ)ち和(ヘ)ぬる

正月三日積(テシ)雪彫成(エリスオイ)重巖之趣(イハホノヨソヒヲ)

奇巧(キコウイロリツクス)絲發草樹之花(ヲヤキテアヤニサケルニ)属(ツケテ)此作(レル)歌二首

掾久米朝臣廣縄

咲(ク)宅(イヘ)の巖(イハホ)に殖(ウ)ゑてこそ松を見乃(ノ)ごと雪をも待(マ)ちけれ

遊行女婦蒲生娘子

雪降乃(ノ)ごと巖(イハホ)に殖(ウ)ゑてこそ挿頭(カザシ)(開(サク)奴可(ヌカ))も世乃(ノ)ちさねめ君乃(ノ)ため

正月三日諸人酒酣更深鶏鳴(ク)

因(テフヨシ)此主人作歌二首

内藏伊美吉縄麻呂

打(ウチ)振(フル)鶏(トリ)の鳴(ナク)(如此(カクノ)許(ゴトキ))聞(キカ)ば遠(トホ)つ神(カミ)の御門(ミカド)ゆ開(ヒラ)けぬるらし

和歌(カヘシ)

零(フル)雪(ユキ)の敷(シキ)て来(コ)ませる君(キミ)を鶏(トリ)鳴(ナク)な

守大伴宿祢家持

鶏(トリ)鳴(ナク)及(マデ)落(フル)雪(ユキ)乃(ノ)いや積(ツモ)りこそ吉事(ヨゴト)にはあらめ

積 吾等 立可必矛 ㊀ろうてはも
ろうてこころ

奉二天皇一歌一首 掾久米朝臣廣縄傳誦之

太政大臣藤原家二縣犬養命婦一

天 冨吕十乃尓布 美安 太之 鳴
おおきみをかしこみおおよみあしなる神し

今日 益 而
きょうまさりてかしこけめやも

悲傷死妻歌一首 并短歌 遊行女婦蒲生傳誦之

作者未詳

天地 愛 無可礼也 光神 鳴 離
あめつちの神いかれやうつくしさ
吾 渡 城嬬
わが妻をかる ひさ 渡る城嬬
携 手 共 将一有
たずさえて共にあんと念ひし

情 遣 奴 拘言 為便 拘作 為便 不知尓
こころやるすべをしらにす

切念離 等 雖一槽
おもいはなれ ぬるものを

千本
ちもとを

反歌

寤 尓等 念 臣之可毛 耳 尓
うつつにもおもいてしかも夢のみに

手本 巻 寐等見 者 須便
たもとまきぬて見れはすべなき

二月二日 會集于守館二宴作一歌一首

判官久米朝臣廣縄以二正税一帳二應入一京師一仍作此歌也

守大伴宿禰家持

之徃者 有婆 久

ひさにあらば梅柳

可吾縵 與共 可年久

比々等之乎可和可々麻之自

越中風土梅花咏 繫三月初咲耳

四月十六日詠霍公鳥歌一首

大伴宿禰家持

二上 峯於乃繁 許毛加之波

霍公鳥 待騰未 來奈賀受

安乎苦佐須等伊麻乎可奈久須

春日祭神之日即賜入唐大使藤

原朝臣清河御作歌一首 參議從

四位下遣唐使

藤原太后 光明子不堕等女

大舶介真揔 繁 貫 吾子甲

翳 國邊 遣 伊波敝 多智

於保乃波良尓 布里於家流 由伎能奈我

和歌

大使藤原朝臣清河 房前四男 參議

三諸 在 待 還

見渡野乃 梅花 波

榮 而 佐家流 枝毛 美流我登母

大納言藤原卿家餞入唐使等宴

去 還

月作歌 三首 大納言藤原卿 房前

不比等男

吾 為故

安里我欲 奈良乃美夜古尓 毛能母

念 去

於毛比都追 伊麻須我其登久

4245 4244 4243

いはひて待てとこふらし
玉宮乃ゆきつかさん
遣唐使乃行帰ふ
守あるへきゆゑ也
すみのえにいつく
凡安云神言託宣也
是東住吉に許き来
る禰宜の託宣そ
清河入唐の継尾
為に舟早かれ云也
住吉ハ神功皇后の時
よ舟を守る神也
けふは此神を
あかれんと云字
此処の則て立ん月
日の近付しと入

民部少輔多治真人土作

すみのえにいつくはふりか神言と（住吉／祝之／言）
ゆくともくとも船は早けん（行／得毛／来／等毛）

大使藤原朝臣清河

あらたまのとしのをなかくわかおもへる（吾念有）
こらにこふへき月ちかつきぬ（児等／可恋／近付）

天平五年贈入唐使歌一首 并短歌 作者未詳

そらみつやまとの国あをによし（虚見都）
ならのみやこゆおしてるや難（平城／京都由／忍照）

唐の近く成也
あをのみやこゆ
やまとのちからの跡
陸まて行三津より
舟にのり入唐のさる也
日の入国 唐は西なれは也
わかせの君 入唐使を云
かけまくのゆゝし
住吉を恐貴む詞也
ふなのへに 舳艫よ虫の
湧さまのかうり
まもりしませてと也
こきはてん 榜泊也
もとのみかと 本朝
と云事也 此人を守ぬ
よ神ねきしおりせとし

波にくたり住の江乃三津に船のり（吉／船）
たゝわたり日乃入国にいたされわか（直／所遣／和我）
せの君をかけまくのゆゝしかしこき住（麻久／忌／伎）
のえのわか大御神ふなのへにうし（吉／吾／大御／船／乃倍／舳）
はきいましふなともにみたゝし（座／船／御立／座）
てさしよらん磯の崎々こきはて（而）
ん泊々にあらき風浪にあはせす
平けくゐてかへりませもとのみかと（久／率而／國家）
に

反歌

奥 遷 越 之 舶

おきつ浪へも 英 泊 てとまる。
こさうりまて 而 はてつる 也。

遣唐時奉母悲別歌一首 中大月 高

安倉人種 麻呂傳誦 阿倍朝臣老人 吾 有

てもやうきみわり 会 成 奴 る
伎 為
さみよわりもん 将別 月 ハ 近 しさね

七月十七日遷任少納言仍作悲別歌贈貽朝集使掾久米朝臣廣縄之館歌二首 八月四日贈之

大伴宿祢家持

既滿六載之期忽値遷替之運於是別舊之悽心中鬱結抃滞之袖何以能早円作悲歌二首以遺莫忘之志其詞曰

君 彼彼之 別 乎 志 也 母
かきりなの結もくおもんてし
心ひさわすらめやも

伊波世野乃 芽子 始 鶯 猟 太 不鳴 哉 特別
それとしもなきまつのさえまもて
ほとゝきす 継 而 来 鳴 哉 特別
ゆかしわれんや

便附大帳使取八月五日入京師 仍設國厨之饌於水内

既滿六載之期 奥の
帥 ハ 遷任少納言 家持 越中ゟ 納言
ようやく 仍て上京
朝集使 庁縄り 掾也

藏伊美吉縄麻呂館餞之時作歌
一首

大伴宿禰家持 越中守 五箇年 而

立別 情

初夜

八月五日平旦上道仍國司次官
已下諸僚皆共視送於時射水郡
大領安努君廣嶋門前林中預設
餞饌之宴時和内藏伊美吉縄麻
呂捧盞之歌一首

大帳使大伴宿禰家持

[illegible]

往 吾 者 公之事跡平夏 將去

事畢退任適遇於越前國掾大伴
宿禰池主之館仍共飲樂也于時
矚茅子花歌一首

正税帳使掾久米朝臣廣縄

殖 有 茅 始 花 之 時 別 度知 奈 客 而 挿頭 而 居 而 待 登

和歌

立 而 居 而 待 登

大伴宿禰家持

於是相与ニ歌ヲ擎頭
君ヲ家ニ遣リテ
君ハ他妻ヲ
さおかさんし
旅別るゝとこゝ家路
い上京ノ我ヲ向ヒヲ
ゐて
歌一首并短歌 大伴宿祢家持
蜻
あきつ羽 山ト
天
真可伊繁
磐
貴イ
柿
平
累
弥嗣
継
継
之
吾
皇
天
治
賜
者
乃布
天下
波疑
向京治上依興預作侍宴應詔
歌一首并短歌 大伴宿祢家持
蜻
あきつ羽 山ト
天
真可伊繁
磐
貴イ
柿
平
累
弥嗣
継
継
之
吾
皇
天
治
賜
者
乃布
天下
波疑

余謂彼地必當足
以恢弘天業光宅
天下蓋六合之中心
平厥飛降者謂是
饒速日矣これ神
武乃立ちとと
雲乃ゐて
又日本紀三日登脈
上嶺聞立而廻望國状
曰蜻蛉洲哉半國之獲矣
又曰饒速日命乗天磐
舟而翔行太虚也睨是
廻而降之故因目之曰
虚空見日本國矣
或い天降ちてと
ヤソヨモ
八十あまおを
排
撰
賜
食
賜
者
従古昔
瑞
利
之
多婢未イ来祢久
千拱
而
無
天
地
吾大皇
知之
八隅
之我
色
花
酒見閇
賜
流
今日
榮
尤
賜
者
乃布
天下
波疑

八十あまおを排撰而賜食而
まひをもし四方人もあて
さらとめ賜者従古昔無
利之瑞多婢未イ来祢久
千拱而無事あをこれ代とあめ天地
しらんぐやます吾大皇知之八隅
秋花乃さういろくふゝめる酒見閇賜
もいさゝ榮流今日尤
あやうゝさ貴

もていつける　兄安
云あらそひを撫ひのるゝ
中臣祓云國中尒荒振神
しらを神とうて小問し
まひ神掃ひよ掃ひき
日本紀一にもはらひすり
させる事之　そのへまひ　とろへをおさめて、の人和平なしむる
なてさりそ仙わてハさすもと云し兄安　あらし　こハ瑞祥
やしくハ世おさまりしさりし時ハ瑞よ兄ね鳥獣も清世よ出
しいすれく　仙云さいの分あらし兄安云八多婢未袮久　絡ねとあらき未決
こまねきてくれあきし代　干戈兵杖をも動さす
て地の日月とてをに　文選卅九屈原九哥云与天地兮比壽与日月兮齊光
さ人きず　業お諷　帝王の万歳乃頌をうてふにめて業のうた
なきれれらくよ　まさふ秋花のきろくふかいうるかし　万歳
と照りてのことそ
兄らしハ助字

反歌

あきのはなくさぐさにあれどいろごとにみしあきらむるけふのたふとさ
（秋時　種　尒有　別　之　明　貴）

為壽左大臣橘卿預作歌一首

いにしへはきみがみよみよつかへ
是ハ諸兄公乃親母
縣犬養橘宿祢乃
ことなれハ續日本紀十二曰
上歴淨御原朝庭下モ
逮藤原大宮事君
致命移孝為忠と
表のみなりて兄ゆ天武
持統文武三代よつ
りつへしやよ故橘姓
をたまはりて給れバ
七代とは仕中の事を云
兄云ハ葛城王なれバ
わかおほきみハとさ
いつくしにえて
仙四手東ら或物に

大伴宿禰家持

いにしへのきみがみよみよつかへけりわがおほきみはななよまうさね
（古昔　三代經　仕　吾　大王　七代　申　祢）

十二月二十日於左大弁紀飯麻呂朝臣家宴歌三首

てにつくるしたかけかけたるみつわくにたなくらのの
（手束　取　而　多奈久良能　野）

きみそこいれしやしさすの
作者未詳　治部卿舩王傳誦之久迩京都時歌

明日香河
あすかがはかはとをきよみおくれゐて
（明日香　河戸　後　居而）

作者未詳　左中弁中臣朝臣傳誦古京時歌

戀者 京 跡遠 曽伎奴

こふるまにもみやこいやとほそらをそらきこぬ

當時矚梨黃葉作歌一首

少納言大伴宿禰家持

十月之具礼 常

かみなびきさとしれりとも吾せこの所見屋戸 黃葉 可落

やまとのみちらまくをしも

壬申年之亂平定以後歌二首

大將軍贈右大臣大伴卿

皇 座 赤駒 腹波布 為 京 師

おほきみの神ろませばあをこまの田井をみやこと

なしつ

皇 都 成通 水奴 麻

すめろきをみやこともがもと

同三月於衛門督大伴古慈悲宿禰家餞入唐副使同胡

麻呂宿禰等歌二首

壽副使大伴胡麻呂宿禰

多治比真人鷹主

我いのち白鳳元年壬申乃年乃乱乃時乃心ハ駒乃

ようひ伏ろ岡も帝乃御盾かともとめし天武帝

吉野を開せますひ大和ろ帝乃龍多伝ふ系乃天皇

おほきみ乃神乃

大王 座

おほきみハ神にしませハあまつ水奴麻 皇都 成通

すめろきをみやこともがもと

同三月於衛門督大伴古慈悲宿禰家餞入唐副使同胡

麻呂宿禰等歌二首

壽副使大伴胡麻呂宿禰

多治比真人鷹主

4262　4263　4264　4265　4266

と祝ふなるをかめし
祝しゆきたらはし
てかへりこん祝言也
行足乃こころし
くしもみじ屋中も
伯田人乃猶へあり
きたる時は三月八
家乃庭をもはらつ
に梳をみずと云
事乃得るく
至重説にをひ
ていふひてく
天皇　斯武なるや
その上は地ゆく船の
上は　日本は神國なれ
は船上も恐れなく

韓國　からくにゝゆきたらはしてかへりこん
ますらたけをにみきたてまつる
作者未詳
梳毛見自　屋中　自　草枕
くしもみじやぬちもはかじくさまくら
多婢　たびゆくきみをいはふとおもひて
勅從四位上高麗朝臣福信遣於難
波賜酒肴入唐使藤原清河等御歌
一首并短歌
天皇
虚見都　山跡　上　そらみつやまとのくにはみづのうへは
地　往　如　座　つちゆくごとくふねのうへはとこにをるごと

神の孫なる法と之
四つの船は大使副使
判官主典ハ四人の遣る使
四艘にて四船の船
を並べて行もすなる
かれかまへと
あらさん日に言切
ふとのあき酒を祝ひ遊
四乃船ならや四乃とも
八日はかりをふくりて
けとみて其帰し
来葉を云ふなり八白
きはまる事を東遣
唐使を含め祝せよ
こそ白り祝ふて
待つ祝ひまつらん也

大　鎮　在　如くおほかみのしづめるくにぞよつの
船　舶　倍　平安　早　ふねふなのへならべたひらけくはやわたりきて
還　奏　かへりごとまうさん日に
句　相　飲　御酒者　あひのまんさけぞこのとよみきは
反歌
還　等　白　香　著　四つの船はやかへりことしらかつけ
朕　裙　鎮　而　将待　わがものすそにいはひてまたん
為應詔儲作歌一首并短歌
大伴宿祢家持
八峯　都我　あしひきのやつをのうへのつがの木の

こうの尊　給くと
いえん泥河おこ泊
まる根の給ふまるく
の泥泊
宝れんと　ふらの
おかて給く給と方
代小ほと宝せのん
こまりやてと
これおり　弟舎
も宴うも玄那
う頂者と給り泊
そせのかく
浴やまおり指
指八達菜心ふ名有
松心又安玄赤指
うすふさく　日本紀云

髻華此云二十鵐こく
又安云うす八頂のか
久年
ちこせ初宝　日本紀ニ
祝と云る栄と泊ひ
給ふこふとも思く
こととうも動の宝
ろうく　五令也
すめろきの今よ万代小
毎年必吸と万代
かてこせさせの宝
天皇大后　聖武帝
光明后宮ろ
大納言藤原て　度前り
卅里八ほて宝て
生てこ雲下来

反歌

如是　許曽
すめろき源代多代小かう
又せあさこめ立ちに
葉

天皇大后共二幸於大納言藤原卿
之家一日拔取黄葉澤蘭一株令内
侍佐々貴山君持之遣賜大納言
藤原卿并陪從大夫等御歌一首
命婦誦之

天皇　載置
者　継而
卅里八ほて君や
吾　之
わ之て等ふ波
伊也　継
いやほて
京師
吉野宮ろ
安　美知之
玉守れんと
大皇
神小ろ
為
又せやすと日八
宇受
指
保伎
解　放　而
紐とさやけて
恵良
仕
奉
貴
者

十一月八日在於左大臣橘朝臣宅(ニ)
肆宴歌四首(ヨツアリノウタ) 太上天皇御製

よろのこに見れども(者)飽かぬ吉野川
又還り見む(者)年の魚鳥(ウヲドリ)

きよき瀬の(不忘)念(可)しおもほゆる
年のはごとに(哉)見む(者)吉野川

左大臣橘卿 諸兄公

年魚良 波布

むろの木(大皇)やまず(知者)通ひて見し人の
座 牟

ますます(知者)かくしもがもと
右大辨藤原八束朝臣(号真楯)

松影(吾大皇之)の(伎)映(小里)せる池の水
底清(婆)みゆく魚(伎)も(樂)遊べり

少納言大伴宿祢家持(三弁ナシ)

天地(足)の(照)遠きがごとく(而)
日月(吾大皇之)の(伎)あり(婆)通はむ(樂)
と思ひて仕へ来し君

十一月二十五日新嘗會肆宴應(ニ)(ス)詔(ニ)歌六首

大納言巨勢朝臣(コセ)

天地(天地)の(貴)遠きがごとく(久)
日月の(貴)足ります(久)と思ひし
大君(貴)

式部卿石川年足朝臣(トシタルノ)

天(五百)の(都)原(綱)振り放け(波布)
て(奈)見れば大君(五百都)
ましぬと(哥)
```
```

天地と久しく万代に
事を業んと仕へまつる
臣下ハ婉まします
ろめおハともいふ
仙日五百枝繩なふと
請まゐらす有本縁也
何為く　口訣
天地と久しきまでによ
訓黒酒白酒清にを
濁ことゝし神する也
周八宅ある万葉に八
黒みきしろみきと云り
しまやまにてれる橘
おのおの多ふ嶋山あり
ある橘と云に同じ
祇日月日宅客九冠

従三位文屋知奴麻呂真人

4275 天地と久しきまでに萬代に仕へまつらん黒きしろきを

右大弁藤原八束朝臣

4276 嶋山にてれる橘うずにさし仕へまつるハまうちきみたち

大和守藤原永手朝臣

4277 袖たれていざわが苑にうぐひすの木傳ひちらす梅乃花みに

少納言大伴宿祢家持

4278 足日木の山下日影かづらける上にやさらに梅をしのばん

乃うすに花橘を
さすとよめり
袖たれてハ袖をたれる也
袖たれていさわかその
梅の花みんとなり
足日木の山下日影
和名云蘿　日カゲ　女蘿也
神事等にかつらにせし
也今ハ日蔭の糸とて
糸を用ゆ　別つるハ
仙日かつらにする也　葉
蘿の如くしてあまめ
また上に梅をそへん
りと　新嘗会小忌に極
のとかはのちにも
仙日のとかはに見
安云のとかはのちと

十一月二十七日林王宅餞之但馬按察使橘奈良麻呂朝臣宴歌三首

4279 能登河の後にはあはんしましくも別といへばかなしくもあるか

治部卿船王

4280 立別れ君がいまさばしき嶋の人はわれしもいはひてまたん

京少進大伴宿祢黒麻呂

少納言大伴宿祢家持

白雪乃山乃寺々山乎曽由久
君乎曽等伎奴伊麻乃麻乎奈美

左大弁葛木王尾上伊伎能手介須流
然物喩曰如前誦之也

雪月乃未遊山乎不怜毛
山乎為流物尓有家流

右大臣橘卿宅宴歌三首

五年正月四日於二治部少輔
石上朝臣宅一嗣家宴歌三首

主人石上朝臣宅嗣

不二相問一
事繁
事毛計久乎安比等左牟
雪乃布礼流乎伎波米
梅乃花

中務大輔茨田王

布敷賣流
梅乃花左家流乃中尓
阿夜尓古保之久
雪乃布礼流可毛

大膳大夫道祖王

新
雪乃敷而
伊米毛未奈礼奴
梅乃花
弥継尓
折而加射左牟
手力毛我母

正月十一日大雪落積尺有二

寸内述(アルソヲヒラニノベ)拙懐三首

大伴宿禰家持

ささの葉のみ山もさやに乱(ト)るまでに吹く風の音を聞くがさやけさ

大君の命かしこみ磯に触り海原渡る大船の梶(御抜布)

ささの葉はみ山もさやに乱るまで降(驚)るこの雪の消(け)まく惜しも

大君の命かしこみ愛(うつく)しき妻を別れて悲しくあるべし

正月十二日侍(テ)二於内裏(ニ)一聞(テ)二千鳥喧(ナクヲ)一作(ヨメル)歌一首

大伴宿禰家持

河渚(布礼)にし鳥の声(知行利)聞けば春の初めはすべくあるらし

二月十九日於(ニ)二左大臣橘家宴(ニ)一見(ル)二攀折柳條(ヲリヨヂルヤナギノエダヲ)一歌一首

大伴宿禰家持

青柳(保都枝)の上枝(うえつえ)の取(と)りて蘰(かづら)くは飽かず(屋戸)我が思へる児(こ)もがも

二月二十三日依興(テ)作歌二首

大伴宿禰家持

春乃野ゝ霞棚引うぐひすの鳴くこゑ聞けば都しぞ思ふ

この夕影に鶯鳴くも

わが屋戸乃伊波太(いはた)の上ゆ青雲の

たなびきゆけば

春日遅遅鶴鳴正晩(ハルヒハリニナリサノチヲ)悽惆之意非(ムニ)歌難(ニシテ)撥(ヒラキ)耳仍作(ラテ)此歌(ヲ)展(ノベ)締緒(ムルノ)

一首 二月二十五日作此

宇良之(ノ)ト照流(テル)大伴宿禰家持

うらうらにてれる日かげに

こころ悲しも ひとりし思へば

春日遅遅鶴鳴正晩悽惆之意非歌難撥耳仍作此歌展締緒

一首 二月二十五日作此

宇良之ト照流大伴宿禰家持

うらうらにてれる日かげに

こころ悲しも ひとりし思へば

春乃野ゝ霞棚引うぐひすの鳴くこゑ聞けば都しぞ思ふ

この夕影に鶯鳴くも

わが屋戸乃伊波太の上ゆ青雲の

たなびきゆけば

春日遅遅鶴鳴正晩悽惆之意非歌難撥耳仍作此歌展締緒

一首 二月二十五日作此

宇良之ト照流大伴宿禰家持

うらうらにてれる日かげに

こころ悲しも ひとりし思へば

遅ゝとうぐひすの鳴くこゑ聞けば

二月三月日遅々とうぐひすを人待ち野辺よりそゝ詠ふる

にほひもの多き春なれば

そゝる春なれば

きりもなくよもつ鳥鳴くこゝろ悲しも

られりるをひとりしおもへば

ま〳〵と出日見ればりき心

或本云

此巻中一山奥黄

掌乃本小哥ゆり

出て他本の名を

ひさるおそき故

かゝることわりなり

ふ日ゝ本小哥ごと

よりたちをもられ

ふ後ゝ奥之

貞享三年七月九七日雨天書新玉津嶋社中子十夜 雪村四 季吟

萬葉集巻第十九